

文化

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

(68)

石原 昌家

1999年7月1日、展覧会のことである。わたがりの研究室に勢いよくノックしてきたのは高名な映像ジャーナリストだった。開口一番、「石原さんは監修委員でしよう、ポーンと作業を進める段取りだっませんか」という風に言われた。新沖縄平和祈念資料館の監修

県平和祈念資料館に展示される壕模型の製作途中の写真。現場に置かれた紙型人形の日本兵は銃を持たずに立っている=1999年7月15日(筆者撮影)



委員会は展示概要を了承した。その後、後ほかに沿って作業を進める段取りだっ

で、作業経過は知らないまま翌日さっそく県担当部長の主宰に電話した。「どうしてその後、監修委員会をの訪問者は新資料館の資料とたまたま、口ごもるよう制作を委託され、作業を続けてきたが、予算を打ち切られてしまったことが記されている。どうして3か月前の間、監修委員会が開催されていないのか、疑問

平和祈念資料館展示問題①

壕内の日本兵銃持たず

監修委「不自然」と指摘

を感じないのか」と言われた。気にはなりながらも、他の仕事に忙殺されている。しかし、新資料館の展示に直接かかわっていると、有名な方が研究室に足を運ぶというのではどうかと暗示を受けた。

を感ぜぬのか」と言われ、気にはなりながらも、他の仕事に忙殺されている。しかし、新資料館の展示に直接かかわっていると、有名な方が研究室に足を運ぶというのではどうかと暗示を受けた。

たまたま、その監修委員会の前日、糸数アブチラガマと轟の壕にまつわる新書版「沖繩の旅」アブチラガマと轟の壕」集英社新書を上梓するため、わた

しは玉城村(旧)糸数集落のアブチラガマの聞き取り調査を実施していた。1975年以後、4度目だった。ガマの南側出入口、民家裏側を日本軍の洞窟陣地として掘削したという元兵士の聞き取り証言を得るの

は、長浜さん方面で南側を結ぶ敵との白兵戦で、兵士の大半が戦死した。もはや、これまでと観念した長浜さんは銃を捨て、ひとり逃げ延びることにした。わたしは兵士が部隊から離脱・逃亡するとき、身を守る武器も捨てるものなんだなとその証言で印象づけられていた。

口近くにひとりの日本兵が立っていた。兵士の前方には母親が子どもの口をふさいでしゃがんでいる場面だった(写真参照)。わたしは、手ぶらで立っている日本兵は、前日聞き取りした長浜元兵士とアブチラガマの日本兵も逃亡兵などなと思った。だが、母親が子どもの口をふさいでいる紙型をみて、子どもの泣き声で敵兵に居場所が知られないように銃を持った日本兵が威嚇している場面だった、と監修委員会で決まっていた場面がよみがえってきた。

暗いガマ内をチエックした後、倉庫の一角にある冷房の効いた事務室で監修委員会が開かれた。制作担当者、アブチラガマと轟の壕」を1年後に控え、県政をゆるがす新資料館展示変更問題の発端だったとは思ってもよらないことであつた。(以下、新資料館問題がつづく)

(次回はず掲載)

琉球新報松永勝利記者から